



日本学士院ニュースレター

2015. 10 No. 16



国際学士院連合総会を2017年に東京で開催することを表明する青柳正規会員

本年5月、ベルギー・ブリュッセルにおいて、国際学士院連合第88回総会が開催され、平成29（2017）年の第89回総会を東京の日本学士院会館で開催することが決定されました。（関連記事5ページ）

目次

第105回日本学士院賞授賞式.....	2	第63回公開講演会のお知らせ.....	10
国際学士院連合第88回総会.....	5	学びのススメシリーズ講演会のお知らせ.....	11
講演会レポート.....	5	会員・客員の逝去.....	12
会員寄稿(久保正彰会員).....	6	飯島澄男会員、欧州発明家賞受賞.....	12
『学問の山なみ』から一歴史をつくった会員一...	7	会員の近刊紹介.....	12
学士院の歩み.....	8	編集後記.....	12

第 105 回日本学士院賞授賞式

天皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、日本学士院は第 105 回授賞式を平成 27 年 6 月 1 日（月）に本院会館（東京・上野公園）で挙行了たしました。本年は、恩賜賞・日本学士院賞 1 件 1 名、日本学士院賞 8 件 8 名の計 9 件 9 名の方々に授賞を行いました。（所属は受賞当時）



杉村 隆院長から賞状・賞牌を授与される細野秀雄受賞者



受賞者と文部科学副大臣、日本学士院役員



授賞式で式辞を述べる杉村院長

恩賜賞・日本学士院賞

「無機電子機能物質の創製と応用に関する研究」

細野 秀雄（東京工業大学応用セラミックス研究所教授、同大学元素戦略研究センター長）

日本学士院賞

「モンゴル帝国史研究」

志茂 碩敏（（公財）東洋文庫研究員）

「高次構造天然有機化合物の合成に関する研究」

鈴木 啓介（東京工業大学大学院理工学研究科教授）

「地球大気環境科学の研究」

近藤 豊（大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立極地研究所特任教授）

「X線観測による中性子星の強磁場の研究」

牧島 一夫（国立研究開発法人理化学研究所グローバル研究クラスター研究顧問）

「光格子時計の発明とその開発」

香取 秀俊（東京大学大学院工学系研究科教授、国立研究開発法人理化学研究所香取量子計測研究室招聘主任研究員、国立研究開発法人科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業 ERATO 香取創造時空プロジェクト研究総括）

「微生物由来活性物質を用いる真核生物の遺伝子発現機構の解析と創薬への応用」

吉田 稔（国立研究開発法人理化学研究所吉田化学遺伝学研究室主任研究員、同研究所環境資源科学研究センターケミカルゲノミクス研究グループ・グループディレクター、同センター創薬・医療技術基盤連携部門・部門長、東京大学大学院農学生命科学研究科教授、埼玉大学大学院理工学研究科連携教授）

「HIV-1 感染症とエイズに対する治療法の研究・開発」

満屋 裕明（熊本大学大学院生命科学研究部教授、国立研究開発法人国立国際医療研究センター理事、同センター臨床研究センター長、米国国立癌研究所レトロウイルス感染症部部長、獨協医科大学特任教授）

「ヒト体外受精・胚移植の確立と普及に関する研究」

鈴木 雅洲（（医社）スズキ病院理事長、同附属助産学校長、東北大学名誉教授）

<受賞者寄稿>

「物質の可能性：小説よりも奇なり」

東京工業大学元素戦略研究センター長・教授 細野 秀雄

超伝導は現象が明快で、特性の優れた物質が見つれば、応用のインパクトは絶大です。ところが、肝心の超伝導状態になる臨界温度 (T_c) を半定量的にでも予想できる理論は未だに確立していません。それどころか、発見以来の歴史を振り返ると、画期的な超伝導物質は、それまでの定説を覆すものでした。科学史上の事件ともいえる 1986 年の銅酸化物の高温超伝導の発見は、超伝導の発現には適さないとされていた酸化物で、しかも層状の物質でした。大きな磁気能率をもつ元素は超伝導の発現には有害というのが常識でしたが、2008 年に私たちが報告した鉄系超伝導体は、磁性元素の代表である鉄の層状化合物でした。しかも、その T_c は 55K まで上昇し、銅酸化物系を除くと最高の温度に達しています。常識が覆っただけでなく、磁性は超伝導の敵ではなく、ある条件下では頼りになる友人になるということが明らかになったのです。この原稿を書いている 8 月末に、200 万気圧の高圧下では水素の化合物が 200K という世界最高の T_c を示す論文が発表され、また予断を許さない展開になりそうな気配です。

もう一つ、物質の可能性を痛感した例を紹介します。電子が陰イオンとして働く結晶を電子化物と称します。私たちは生石灰と酸化アルミニウムから構成される結晶 (C12A7) を使って、室温で安定な電子化物を初めて実現しました。C12A7 はアルミナセメントの成分の 1 つで、もちろん電気が流れると書いたら入試に落第するような代表的絶縁体。ところが、少し工夫を施すと半導体のよ

うに電子がドーピングできることに気づきました。ドーピング量を多くしていくと、金属のような良導体になり低温では超伝導を示したのです。私自身、この物質の研究を始めた際には全くの想像外でしたが、金属化ができたので次は超伝導というのが自然な流れでした。むしろ、挑戦的だったのは、C12A7 電子化物の触媒としての検討でした。明らかにしてきたユニークな電子物性を効果的に活かせるテーマを考えた結果、優れたアンモニア合成触媒としての可能性があるのではと発想しました。この研究は新超伝導物質の探索という主題で採択された FIRST プロジェクトの中でサブテーマとして実施しました。採択時のコメントに「予算が縮減されたので、本筋とは関係ない触媒の研究はカットすべきだ」とありましたが、「責任は私がとるのでやってみよう」と同僚の触媒化学のエキスパートに共同研究をもちかけました。内心は薄氷を踏む思いでしたが、関係者の努力でそれなりの成果が得られ、次のプロジェクトに繋がりました。

新型ディスプレイ駆動用の薄膜トランジスタとして実用化された IGZO などの酸化物半導体研究を開始した当時も、まさか世界を席卷しているアモルファスシリコンを置き換えられると本気では思っていませんでした。物質には研究者の工夫次第でとんでもない可能性が秘められているようです。ワクワクする面白い物質研究から、社会に直接役立つ材料へのジャンプを狙うのが、材料研究の醍醐味です。これからも物質の可能性を信じて精進したいと思います。



研究資料の前で



細野受賞者夫妻と本院会員

<受賞者寄稿>

「ありふれた語の字面の奥深くに潜むもの」 公益財団法人東洋文庫研究員 志茂 碩敏

モンゴル帝国は、「遊牧君主チンギス・カンと、チンギス・カンのもとに、その“家族員”という絆で結集した遊牧騎射戦士達との軍事連合体」である。その国名「イェケ・モンゴル・ウルス」（チンギス・カンのモンゴル騎射戦士連合）には政権構造が極めて端的に表現されている。「イェケ」は通常は「大きい」の意。ここでは「偉大な人」、「御大将」、即ち、「チンギス・カン」を示す術語として使われている。「ウルス」は、「騎射戦士（『ご家人』）達の軍事連合体」の意味である。

「ご家人」はチンギス・カンの身边に仕えて家政を司り、昼夜の警護を担当し、戦時には指揮官として出征した。「チンギス・カンの家人」で、「チンギス・カン側近の有力戦士」である「ご家人」達こそがモンゴル帝国存立の基幹であった。チンギス・カンと「ご家人」達との連合の絆は時空を越えて子孫達に継承されていった。両者の連合の絆の由来と展開の詳細については、チンギス・カン直系のモンゴル君主自らの口述に基づく貴重なペルシア語史書『モンゴル史』が存在した。

ところが、19世紀以来の諸先学は、『モンゴル史』中に頻出する術語「ご家人」のペルシア語訳語「大戦士」(amir-i buzurg)を普通名詞とみて全面的に考察の対象外に放置し続けてしまった。「大」が、「チンギス・カン」を意味する術語「イェケ」のペルシア語直訳体とは全く気づかなかつたのである。「大戦士」は、「チンギス・カン〔一門〕の身边に仕える戦士」の意で、「ご家人」を意味する。術語「大」に対応できなかった唯一事のため、唯一無二の史料と称された『モンゴル史』の核心部分は

殆ど理解されず、モンゴル帝国史研究は百数十年にわたって彷徨・迷走し続けることとなった。

『モンゴル史』中の「ご家人」達を精査すると、チンギス家譜代の家人の家系出身者・チンギス・カン一門の舅・婿・養父・養子・義兄弟・乳兄弟等々、チンギス・カン一門に、より古くから、より身近に仕えた者達が重鎮として当該政権を支えたことが判明し、モンゴル帝国存立の絆が、王族と騎射戦士達との擬制家族関係にあることが確認される。

本来は軍人である遊牧民達は、自らの言語で、自らの記録を残すことは稀であった。爾余の遊牧国家を研究するにあたって、定住民の記した史料を典拠とする場合が多い。平明な字面の奥深くに潜む遊牧国家固有の術語の真の意味を抉り出して臨めば、モンゴル帝国と同様に、擬制家族関係に基づく絆が明らかになるであろう。



モンゴル帝国の政権構造：授賞式研究資料説明より抜粋



天皇后両陛下に研究をご説明する志茂受賞者



本院会員と談笑する志茂受賞者夫妻

国際学士院連合第 88 回総会

5月24日～28日まで、ベルギー・ブリュッセルのベルギー王立科学・人文・芸術アカデミーにおいて、国際学士院連合第88回総会が開催され、日本学士院からは、同連合の代表を務める青柳正規会員（同連合副会長）と佐藤彰一会員が出席しました。国際学士院連合は、人文・社会科学分野で協同して研究や出版を行うための組織です。（8～9ページで同連合の歴史を紹介していますので、ご参照ください。）

本年の総会には40ヶ国から60人余の代表が参加しました。具体的には、国際学士院連合が行っている学術的プロジェクトについての2年・6年ごとの評価が行われたほか、英国学士院会員ニコラス・シムス＝ウィリアムズ氏による学術講演「バクトリアの文書群：古代アフガニスタンの失われた歴史を再構成する」や、4人の研究者が各々30分程度の報告を行う「競争的アカデミック世界における人文学」と題するテーマセッションが行われました。なお、同連合の共通言語はフランス語及び英語が用いられています。

同連合の総会は従来年1回開催でしたが、今回より2年に1回開催されることとなり、第89回総会は2017年に開催されます。本年の総会では、次回総会は東京で開催することが決定されました。同総会が日本で開催されるのは、90年を超える国際学士院連合の歴史で初めてのことです。

講演会レポート

5月23日（土）に山形大学との共催並びに山形県教育委員会及び山形新聞・山形放送の後援により、第62回公開講演会を山形大学において開催しました。

山形県では初めての開催となった今回の講演会では、まず、公開講演会委員会委員長入谷明会員、山形大学小山清人学長より挨拶が行われ、その後、小山貞夫会員（東北大学名誉教授）が「マグナ・カルタ 800周年に寄せて—マグナ・カルタとその神話—」、常協恒一郎会員（京都大学名誉教授、福井県立大学名誉教授）が「コムギの母系を尋ねて」と題して講演を行いました。

小山会員はマグナ・カルタ原文写真版を回覧しながら、また、常協会員はグラフ・図絵を用いながら、それぞれ分かりやすく説明を行い、聴講者は熱心に聞き入りました。講演終了後は活発な質疑応答がなされ、最後は盛大な拍手とともに閉会しました。



総会会場（ブリュッセル・ベルギー王立科学・人文・芸術アカデミー内）



閉会総会で次回総会の日本開催について説明する佐藤彰一会員



講演を行う小山貞夫会員



講演を行う常協恒一郎会員

(会員寄稿)

古い血筋に流れる新しい命

久保正彰 会員
(西洋古典学専攻)

去る八月酷暑の日、オランダから、『ユトレヒトの父母たち - 1650 以前』と題する一冊の本が送られてきた。送り主は、マルチン・ボーク、ユトレヒト在住の美術史家、アムステルダム大学の教授である。ボーク教授は、二十年以上も昔、私が十七世紀のオランダの古典学者ヤコブス・ホイエルについて調査を進めていた折りに、絶大な支援を賜ったかたである。教授はオランダ絵画の黄金期を築いた芸術家たちのパトロンとなった当時の名士たちの系譜を詳細に調査しておられた。その御陰で、かねてより私が探していたホメロス研究家ヤコブス・ホイエルと言う人物が、当時ユトレヒトの屈指の名門ホイエル家の嫡男であることを、膨大な系譜資料をもとに、丁寧に教えて下さったのである(詳細は、『日本学士院紀要』第五十七巻第三号、235-275 頁、2003 年参照)。

送られて来た書物の表紙には、暗赤色の古いオランダ地図の上に表題が刷られ、その下にホイエル家の家紋と、十六世紀オランダの歴史に輝かしいホイエル家の家名を刻み残したデイルク・ホイエルとその妻アンナ・ヴァン・ウーデワートルの二人の肖像画が印刷されている。開いてみると、この三百五十ページ余の書物は、1650 年前後に、ユトレヒトの名門とされた三家族の系譜の委細を、オランダ諸地に現存する全資料をもとに記述したものであり、なかでもホイエル家の人々に関するものが際立っている。

そのホイエル家の部分の担当責任者が、この本の送り主マルチン・ボーク教授であるが、全体の編集は、『われらの先祖たち』と称される全オランダ系譜連盟のもとに行なわれており、手もとに送られて来た一巻は、そのシリーズ刊行物の第四巻にあたる。オランダ連邦が北ヨーロッパにおいて最盛期を迎えていたころ、その諸地のみか、遠く大西洋の南北両岸、アフリカ、インド、ジャワスマトラ、台湾、長崎までに、活躍の環をひろげていたことが、系譜の上にもはっきりと痕跡を遺している。そして当時のオランダ人たちの系譜を辿り直すことによって、かれらが歴史を織りなした古い血筋を、はっきりと甦らせる、というシリーズ全体の編集趣旨も窺われる。

私のオランダ語の読解力は中途半端であり、辞書を片手の苦渋の拾い読みにとどまるものである。それでも、ホイエル家の最後の嫡男ヤコブス・ホイエルについての

昭和5年、東京都生まれ。

ハーバード大学卒業、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。成蹊大学文学部助教授、東京大学教養学部助教授、東京大学文学部教授・文学部長、東北芸術工科大学学長等を歴任。東京大学名誉教授・東北芸術工科大学名誉教授。瑞宝重光賞受章。平成25年10月まで日本学士院長を務める。



記述が異常に長く詳しい。このヤコブスは、その先祖たちとは違い、生前きらびやかな公職で身を飾ったことはなく、しかも三十八歳という若さで亡くなっている。その生涯を物語る資料といえば、ユトレヒト大学に残る学歴記録と学生時代の講義筆記ノート類、短い「英国旅行記」のノート・ブック、ホメロスやアリストファネスの古い版本に自筆で書き込んだ細かい注記、自筆で写した三冊の分厚い古代ギリシャ語辞書、そして最後にかれの葬儀に招かれた列席者名簿、死後競売に付されたかれの蔵書目録、それが客観資料の全部であって、かれ自身の名を冠した著作は一点もなく、交友からの手紙は十通あまり残っているが、かれの自筆の手紙は発見されていない。このように、公私の何れの記録に於いても無名にちかいヤコブスが、ホイエル一族の最後を飾るに相応しいものであったかのように、幾枚もの挿絵入りで紙面を占めているのは、何故であろうか。

マルチン・ボーク教授が、その前書きや後書きに記されているところから、自分勝手な想像を逞しくすれば、それは二十年近くも昔、ユトレヒトやアムステルダムの大学図書館へ私を案内して、そこで長い時間私のヤコブス探しの道しるべについて手助けをして頂いたこと、またオランダ絵画展の講師として来日されたおり、八ヶ岳南麓の山小屋書齋をお訪ねくださり、そこで夜を徹して、ヤコブスのホメロス研究の意義について話し合ってくださいましたこと、またかれの蔵書売立て目録から浮かびあがる、かれの曾祖母アンナの家系ウーデワートル一族とその周りにちりばめられている傑出したギリシャ学者たちの名前などについて語り明かしたことなどが、昨日のことのように記憶から甦る。上にも記したように、ヤコブスの曾祖母アンナの像が、送られて来た書物の表紙に印刷されているのも、ゆえない事ではなかったと、今、初めて判る思いがしたのである。

ボーク教授は、ユトレヒトの古い、古い血筋に、新しい命が流れ始め、次ぎの世紀のヨーロッパ全土に、学問的興味の渦を巻き起こすホメロス問題が、呱呱の声を上げるそのさまを、ここに記そうとされたのであろう。

ご本を頂いて感謝の思いのあまり、古本の虫の咬きに過ぎないこのような私話で News Letter の紙面を汚してしまつたことをお許し願いたい。

『学問の山なみ』から—歴史をつくった会員—

130年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回2名を紹介します。

箕作佳吉 みつくり かきち

安政4(1857)年—明治42(1909)年
明治30(1897)年 東京学士会院会員選定



江戸の津山藩邸の生まれ。蘭学者で東京学士会院会員の箕作秋坪の三男で、兄弟に洋学者の奎吾、数学者の菊池大麓、歴史学者の元八がいる。慶應義塾に短期間在籍後、大学南校(東京大学の前身)で英語を学んだ。

明治6(1873)年に渡米し、明治12(1879)年にイエール大学を卒業した。同年、ジョンズ・ホプキンス大学に入学し、ブルックス教授の下で原鰓類のエラの構造を研究し、帰国後の明治16(1883)年に博士号を贈られた。明治14(1881)年には英国ケンブリッジに移り、バルフォア教授の下で発生学を研究。同年末に帰国し、東京大学理学部の講師に採用され、明治15(1882)年、日本人初の動物学担当の教授となった。

明治30(1897)年には、ワシントンで開かれた北太平洋とベーリング海におけるオットセイの保護に関する国際会議に、日本代表として出席した。明治31(1898)

年に帰国し、東京帝国大学理学部附属三崎臨海実験所の所長となった。明治37(1904)年まで所長を続け、実験所を発展させた。明治34(1901)年には、東京帝国大学理科大学長に選ばれた。

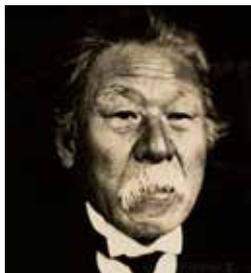
明治37(1904)年にセントルイス万博の際に開かれた学術会議で、彼は日本代表の一人(他に穂積陳重と北里柴三郎)に選ばれた。日露戦争の最中であり、国際世論を日本に有利にするため努力した。その後、健康を損ない、病状が深刻となった明治40(1907)年に理科大学長を辞任。2年後52歳の若さで亡くなり、東京の谷中墓地に埋葬された。

箕作は、東京高等女学校の校長を務めた他、農商務省の関係では、水産調査委員会委員、水産講習所商議員、内国勸業博覧会の審査官を務めた。会長を務めた東京動物学会(現日本動物学会)では、動物学雑誌と欧文誌の日本動物学彙報を創刊するなど、その発展に貢献した。

真珠の養殖など水産物工業にも関係したが、大部分の研究は純粋な動物学である。特筆すべきは帝国大学紀要(理科)に明治20(1887)年~明治29(1896)年に5報を掲載した「は虫類の発生学への貢献」であり、カメ目の中胚葉の形成や脊椎動物における卵分割などを論じた。その後、10年以上ナマコの分類に関する研究を行ったが、公務多忙の上早世し、完成には至らなかった。

石川千代松 いしかわ ちよまつ

万延元(1860)年—昭和10(1935)年
明治44(1911)年 帝国学士会院会員選定



江戸・本所の生まれ。少年時代より生物学に強い興味を持ち、外国語学校在学中、教師であったフェントンの影響で蝶や蛾を採集し、ミスジチョウという新種の蝶を発見、また米国のヘンリー・エドワードと標本の交換を行ったり、論文を発表したり

した。東京大学(旧制)に入学後は、動物学教室を担当したホイットマン博士の指導の下、動物学を学んだ。明治15(1882)年に大学を卒業後、御用掛准助教授となり、翌明治16(1883)年に東京大学の動物学の助教授に採用された。同年、動物学教室でホイットマンの前任であるモースの講義をまとめた『動物進化論』を著し、以後進化論の啓蒙に努めた。明治18(1885)年にドイツに留学し、フライブルク大学のワイスマン教授の下で無脊椎動物のヒドラの研究などを行い、明治22(1889)年

に博士号を得た。同年に帰国後、帝国大学理科大学(現東京大学理学部)助教授の職に戻り、翌年、帝国大学農科大学(現東京大学農学部)の教授となり、明治23(1890)年に理学博士号が授与された。明治33(1900)年に、大学と併任で帝室博物館(現東京国立博物館)の天産部長兼動物園(現東京都恩賜上野動物園)監督に採用された。在任中、積極的にオーストラリアやドイツの動物園と動物交換を行い、展示の充実を図った。現在、上野動物園では、石川を初代園長としている。大正12(1923)年には大学を退職し、名誉教授となった。昭和10(1935)年、台湾に滞在中に病気を得て亡くなり、東京の谷中墓地に埋葬された。

石川は、発生学・細胞学・実験動物学・分類学などの分野で、夜光虫・サンショウウオ・鯨など様々な動物を対象に研究を行った。特筆すべきは小鮎の研究である。琵琶湖に住む鮎は6~7cmと小さいことから小鮎と呼ばれ、他の地域の30~40cmに成長する鮎とは別種であると考えられていたが、比較研究や養殖などを行った結果、これらが同種であることを明らかにした。また、多摩川などへの移植をも試み、鮎の養殖の先駆となった。

学士院の歩み 第9回 国際学術団体への加入

日本学士院は、明治6（1873）年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12（1879）年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39（1906）年に帝国学士院に改組し、昭和31（1956）年に現在の日本学士院となりました。このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介いたします。

帝国学士院の成立と万国学士院連合会への加入

明治12（1879）年に成立した東京学士会院は、明治の後半には予算等の減少により十分な活動ができないようになっていた。また、改革案が出されたが、実現には至らなかった。このような状況の中で、帝国学士院の成立を実現させるための直接の重要な契機となったのが、東京学士会院の万国学士院連合会（Internationale Assoziation der Akademien）への加入問題であった。

万国学士院連合会は、諸国のアカデミーが相互に連絡をとり、世界の学術の発達に貢献することを目的とする国際団体である。ドイツ国内諸州の4アカデミーが相互に持っていた研究連絡の合同集会在母体となり、ロンドン王立協会などの参加を得て、明治31（1898）年に設立された。そして、明治38（1905）年の初頭、在ウィーン特命全権公使の牧野伸顕を通して、同連合会会長であったウィーン科学アカデミー院長E・ジュースが東京学士会院へ加盟を勧めてきたのである。

東京学士会院は、同連合会の由来、性格、事業等を調査し、審議の結果、これを受諾することとし、文部省から外務省を通じて、現地の牧野公使へ回答した。一方、学士会院規程改正案の作成も並行して進められた。このようにして、万国学士院連合会加入の準備が整い、予算の増額も認められ、明治39（1906）年6月、「帝国学士院規程」の公布により、帝国学士院が成立した。

明治39（1906）年12月、帝国学士院は、万国学士院連合会に加入し、国際的学術活動を開始した。万国学士院連合会からは、その加盟が決定した旨、明治40（1907）年2月、本院に正式に通知された。そして4月、ウィーンにて開催の第3回総会にはじめて、第1部の重野安釋（歴史学）、第2部の菊池大麓（数学）両会員をその代表として派遣した。明治43（1910）年4月、ローマにて開催の第4回総会には櫻井錠二会員（化学）を、さらに大正2（1913）年、ペテルブルクにて開催の第

5回総会に坪井正五郎（人類学・考古学）会員を派遣したが、大正3（1914）年、第1次世界大戦が起これ、万国学士院連合会もその活動を停止するに至った。

万国学術研究会議

大戦が終末に近づいた大正7（1918）年の初頭、イギリスのロンドン王立協会が主唱し、パリの科学アカデミーが賛同して、連合国側の科学アカデミーを統合し、万国学術研究会議（International Research Council）を組織することとなった。同会議は、現在まで続く国際科学会議（ICSU）の前身である。帝国学士院も創立会議へ代表を派遣することとなり、櫻井錠二、田中館愛橘（地球物理学）の両会員を派遣した。

万国学術研究会議の創立会議は大正7（1918）年10月、ロンドン王立協会で開催された。議事の第1は、「本決議の前提とすべき宣言」の可否についてであった。「国際学術協力は相互的に絶対信頼の観念があつて成立するものであるのに、今回の大戦に現れた中欧諸国の行動には背信的のものが数々あることに鑑み、将来は学術協力に関するかぎり、中欧諸国と手を携えて進むことができないことを誠に遺憾とする。依つて連合諸国と米国とは在来の国際的学術団体から脱退する」という趣旨の「宣言」である。この「宣言」は、結局全会一致をもって採択された。

万国学術研究会議の設立とともに、各加盟国のアカデミーは、それぞれの国において学術研究会議の創設に努力する責務を負うこととなった。帝国学士院においても検討を進め、大正8（1919）年6月、穂積陳重帝国学士院長名の「学術研究会議ノ設置ニ関スル建議」が原敬内閣総理大臣及び中橋徳五郎文部大臣宛に提出されたのである。そして、大正9（1920）年8月、学術研究会議官制が公布された。そして、会員の決定等を経て、12月に第1回総会を開き、学術研究会議が成立した。大正10（1921）年以降は、学術研究会議が万国学術研究会議に加盟することとなった。学術研究会議は、第2次大戦後、日本学術会議に改組される。

国際学士院連合

第1次大戦後の国際学術組織再編の動きは、上述のように、まず自然科学の領域において起こったが、人文科学分野でも、万国学術研究会議の創設から遅れて1年後、フランスの碑文・文芸アカデミーが主唱者となって、国際学士院連合（Union Académique Internationale）設

立の議が起こったのである。(注:設立当初、同連合を「万国学士院連合会」と訳していたが、上述の組織との混乱を避けるため、ここでは「国際学士院連合」と訳す。)

大正8(1919)年5月、パリにおいて、その創設に関する予備会議が開かれ、ベルギー、フランス、イタリア、ルーマニア、アメリカの代表者が参加し、日本とギリシャは準代表を送った。帝国学士院からは、当時パリ在住の姉崎正治(宗教学・哲学)会員にその出席方を依頼した。

同連合創立会議は、大正8(1919)年10月15日から18日、パリで開かれた。代表の参加国は、ベルギー、デンマーク、フランス、イギリス、ギリシャ、オランダ、イタリア、日本(高楠順次郎(インド哲学)、小野塚喜平次(政治学)両会員)、ポーランド、アメリカ、ロシアの11カ国、23名であった。

会議は、フランス代表E. セナールを議長に選び議事に入った。同連合の目的は、「加入諸国の学士院及びその他の学術団体は、協同して研究及び出版をなし、もって言語、考古、歴史、道徳、政治及び社会等の諸学の進歩を図る」とされた。組織や活動を定める規程案の審議が終了すると、同連合の事業である共同研究及び出版計画に関する議事に入り、いずれも、具体案を検討して採択された。事務局はベルギー・ブリュッセルに置くこととなった。

帝国学士院では大正9(1920)年1月の総会において、国際学士院連合への加入の件が議決された。そして、同年5月、ブリュッセルにおいて開催された同連合第1回総会へ服部宇之吉(東洋哲学)、織田万(行政法)両会員をその代表として派遣して以来、毎年の会議にその代表を派遣した。帝国学士院は、昭和14(1939)年開催の同連合第20回総会まで毎回代表を派遣したが、第2次大戦の勃発によって、同連合もその総会の開催を延期することとなったため、帝国学士院代表の派遣も無期延

期となった。

第2次大戦後の国際学士院連合と日本学士院

第2次大戦後の昭和22(1947)年、帝国学士院は日本学士院と改称され、昭和24(1949)年には日本学術会議の附置機関となった。しばらくは国内が混乱期にあったことや、日本学術会議が国の内外を代表する機関とされたことから、終戦後、日本学士院が対外活動をすることはなかった。しかし、昭和26(1951)年のサンフランシスコ平和条約の締結後は、日本学士院に招請状を発する国際団体が数多くみられるに至った。

このような状況下において、日本学士院は、国際学士院連合からその復帰方の要請を受けたのである。国際学士院連合は戦後、昭和22(1947)年から活動を再開し、昭和24(1949)年以降はユネスコ傘下の国際哲学人文科学協議会(CIPSH)に加入し、同協議会を通してユネスコの財源的援助を受ける団体となっていた。日本学士院は、同連合創立以来の会員であったので、これへの代表派遣を企図したが、内外に代表する日本学術会議との関係から、同年は見送らざるを得なかった。

しかし、日本学士院は翌年開催の同連合への代表派遣の件を早くから企図し、日本学術会議と種々協議した結果、同会議附置の日本学士院から同連合へ代表を派遣することは、同会議の権限を侵すことにはならない旨の合意に達し、昭和27(1952)年6月、ブリュッセルにて開催の国際学士院連合第26回総会へ本院代表として宮沢俊義(憲法)会員を派遣したのである。それ以後、日本学士院は現在に至るまで毎回の総会に代表を送っている。なお、昭和31(1956)年に施行された日本学術法において、日本学士院は日本学術会議から分離独立したが、同法第7条には「日本学士院は、国際学士院連合に加入することができる。」と記されている。

国際学士院連合において帝国学士院・日本学士院が関係してきた委員会は、古代の壺集成、インドネシア慣習法、在外未刊行日本関係史料、パリ語辞典、アフリカ歴史資料、太平洋地域言語地図等であるが、特に在外未刊行日本関係史料は、大正11(1922)年に帝国学士院が提唱し、主体的に活動している委員会である。海外(計19カ国)所在の日本に関する歴史文書をマイクロフィルムに撮影して収集するもので、国費の他、国際学士院連合、CIPSH、オランダ政府等から補助金を受けて事業が行われ、収集した資料は総計200万頁に達するとされる。なお、同事業は昭和29(1954)年より翻訳・研究を含め東京大学史料編纂所に委嘱している。

(『日本学士院八十年史』『日本学士院小史』等を参照)



国際学士院連合第1回総会の報告書

第 63 回公開講演会のお知らせ

平成 27 年 10 月 24 日（土）、第 63 回公開講演会を日本学士院において開催します。

根岸 隆会員は「ワルラスの櫛の木」、岸本忠三会員は「免疫難病治療への新しい時代の到来 —免疫調節因子 (IL-6) の発見から創薬へ—」というタイトルでそれぞれ講演を行います。

《開催日時》

平成 27 年 10 月 24 日（土） 午後 2 時～5 時 10 分

《会 場》

日本学士院（東京都台東区上野公園 7-32）

入場無料

必要事項を記入の上、下記まで事前にお申込ください。

定員 150 名、先着順。

＜申込方法＞

日本学士院ホームページから、または e-mail、FAX、往復ハガキによる

＜必要事項＞

氏名（フリガナ）、住所、電話番号等連絡先

日本学士院公開講演会係

〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105

e-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp

http://www.japan-acad.go.jp/

上野の山文化ゾーンフェスティバル 講演会シリーズ

第 63 回 日本学士院
公開講演会
THE JAPAN ACADEMY 63rd PUBLIC LECTURE

2015年10月24日[土]
午後2時～5時10分

会場/日本学士院会館 東京・上野

講演1: ワルラスの櫛の木
講演2: 免疫難病治療への新しい時代の到来
—免疫調節因子(IL-6)の発見から創薬へ—

根岸 隆
岸本 忠三

ワルラスの櫛の木

根 岸 隆

経済学の歴史において、物理学におけるニュートンにも比すべき地位を占めるスイスの学者レオン・ワルラス (1834-1910) の次のような主張について考えてみたい。

「ひとは自分のおこなったことに明確な認識をもたなくてはならない。もし収穫を急ぐならば、人参やサラダ菜を植えるべきである。しかしもし櫛の木を植えるだけの野心があるならば、自分自身にこう言いかせるべきであろう。わたくしの孫たちはこの緑陰をわたしに負っているのだ、と。」

これはワルラスが書いた手紙の一部であるが、だれに於てた手紙なのか、必ずしもあきらかでないので調べてみたい。

免疫難病治療への新しい時代の到来

—免疫調節因子 (IL-6) の発見から創薬へ—

岸 本 忠 三

IL-6 の遺伝子単離からその受容体の構造解明、シグナル伝達の全容解明へとつながった我々の一連の研究から抗 IL-6 受容体抗体 (Tocilizumab) が生まれ、リウマチの治療にパラダイムシフトを招来したと言われる、現在世界 100 カ国以上で使われるブロックバスターとなっている。

小児の全身性特発性関節炎 (JIA) にも著効を発揮することが国際的な治験から実証されたし、現在、強皮症、リウマチ様筋痛症、高安病、巨細胞動脈炎、視神経脊髄炎等で治験が行われている。



根岸 隆会員



岸本忠三会員

学びのススメシリーズ講演会のお知らせ

本講演会は、様々な分野で素晴らしい研究を重ねてきた日本学士院会員が、日本の将来の担い手となる子どもたちに知ることのおもしろさ、学ぶことの楽しさを知ってもらおう一助になればという思いから企画されました。

iPS 細胞 —失敗の中からヒントを見つける—

日本学士院会員、京都大学 iPS 細胞研究所所長・教授

山中 伸 弥

《開催日時・場所》

平成 27 年 12 月 12 日 (土) 午後 2 時 30 分～

日本学士院会館

《対象》

中学生・高校生 (定員 50 名)

iPS 細胞は、皮膚や血液など体の細胞に山中因子と呼ばれる遺伝子を送り込むことで、まるで受精卵のように身体中のあらゆる細胞へと役割分担 (分化) する能力を得た細胞です。研究を始めた当初は、作製に至るまでに 20～30 年かかってもおかしくないと思って覚悟を決めていましたが、研究室の若者たちの頑張りのおかげで、わずか数年で達成することができました。はたから見たら、順調に研究を進めているように見えるかもしれませんが、実験には失敗がつきものです。そして、一見、失敗に見えることでも、中立な視点でデータを捉え直すと、自然からのヒントが現れてくることもあります。試行錯誤の中で、どのように iPS 細胞作製まで至ったのか、そこからどのように展開させてきたのか、今回はその道程についてご紹介したいと思います。



《申込方法等》

本院 HP、メール、ファックスのいずれかの方法でお申込ください。メール・FAX の場合、「学びのススメ聴講希望」と明記の上、聴講者氏名、フリガナ、住所、電話番号、メールアドレス、中学生/高校生の別を記載して、下記の連絡先にお送りください。お席に限りがございますのでお申込はお早めをお願いいたします。

日本学士院 事務局

〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

TEL 03-3822-2101 FAX 03-3822-2105

電子メール kouenkai2@japan-acad.go.jp

<http://www.japan-acad.go.jp/>

第8回 日本学士院
学びのススメ
講演テーマ
iPS 細胞
—失敗の中からヒントを見つける—
対象：中学生・高校生

行って、見て、発見！
講演無料
事前申込制
(先着 50 名)

講師 **山中伸弥**
日本学士院会員
京都大学 iPS 細胞研究所所長・教授

開催日 平成 27 年 12 月 12 日 (土)
時間 午後 2 時 30 分～
(質疑を含めて 1 時間程度を予定)
場所 日本学士院会館 (東京・上野公園内)

◆後援：台東区・台東区教育委員会 ◆協力：上野の山文化圏連絡協議会
●お問い合わせは事務局 〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32
TEL 03-3822-2101 FAX 03-3822-2105 e-mail kouenkai2@japan-acad.go.jp

会員・客員の逝去

平成27年4月以降、次の方が逝去されました。

小林道夫 会員 (第1分科・西洋近世哲学・科学哲学専攻)

平成27年6月2日 享年69歳

南部陽一郎 客員 (米国・理論物理学専攻)

平成27年7月5日 享年94歳

飯島澄男会員、欧州発明家賞受賞

飯島澄男会員(第5分科・物質科学)が平成27年6月に欧州特許庁より、欧州発明家賞(非ヨーロッパ諸国部門)を受賞しました。

会員の近刊紹介

- ・難波精一郎(編著)『音と時間』コロナ社、平成27年6月
- ・ベルンハルト・ビショッフ(著)、佐藤彰一・瀬戸直彦(訳)『西洋写本学』岩波書店、平成27年9月
- ・パスカル(著)、塩川徹也(訳)『パンセ(上)』岩波文庫、平成27年8月
- ・菅阪直行(編)『成長し衰退する脳—神経発達学と神経加齢学(社会脳シリーズ8)』新曜社、平成27年4月
- ・小田 滋『小田滋・回想の法学的研究』東信堂、平成27年7月
- ・カール・シュミット(著)、樋口陽一(訳)『現代議会主義の精神的状況 他一篇』岩波文庫、平成27年7月
- ・佐藤幸治『立憲主義について 成立過程と現代』放送大学叢書、平成27年4月
- ・佐藤幸治『世界史の中の日本国憲法 立憲主義の史的展開を踏まえて』左右社、平成27年7月
- ・江頭憲治郎、中村直人(編著)『論点体系 会社法 補巻』第一法規、平成27年6月
- ・Akira Hayami "Japan's Industrious Revolution", Springer, 2015
- ・Akira Hayami "The Influenza Pandemic in Japan, 1918-1920", International Research Center for Japanese Studies, 2015
- ・石井寛治、速水美智子、内海 孝、手島 仁『前橋学ブックレット① 日本製糸業の先覚 速水堅曹を語る』上毛新聞社、平成27年4月
- ・西村和雄、友田康信『経済学ゼミナール 上級編』実務教育出版、平成27年8月
- ・大村 智『人生に美を添えて』生活の友社、平成27年7月

- ・益川敏英『科学者は戦争で何をしたか』集英社新書、平成27年8月
- ・井村裕夫(編)『医と人間』岩波新書、平成27年7月
- ・井村裕夫、稲垣暢也(編)『発症前に診断し、介入する先制医療実現のための医学研究』羊土社、平成27年4月

編集後記

今回のニュースレターでは、日本学士院第105回授賞式及び受賞者からの寄稿のほか、国際学士院連合総会、本年開催予定の公開講演会と学びのスズメ講演会などについてお知らせしています。ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

No.14の編集後記でご紹介した2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた上野「文化の杜」新構想の実行委員会が9月に立ち上がりました。今後、「文化の杜」の共通イベントの実施や共通パスポート(入館券)の導入などの取組が進められる予定です。

この新構想では、上野「文化の杜」で3,000万人の集客を一つの目標にしていますが、データとして示されている平成26年度台東区観光統計・マーケティング調査によれば、上野公園の平常時の観光客数は1,253万人で、これにアメ横や谷中地区の観光客数を含めれば2,000万人を超えると推測されています。

同調査によれば、平成26年に台東区を訪れた年間観光客数(推計)は4,504万人で、そのうち外国人は526万人と前回(平成24年)調査より100万人増加となっています。外国人観光客へのアンケートで来訪目的(複数回答)をみると、上野地区では美術館・博物館が51.6%、谷中地区では散歩・散策が82.5%となっています。私は昼休みに時々上野公園から谷中辺りまで散歩するのですが、今年の夏は、地図とカメラを持って谷中地区を散策している外国の方を、昼の短い時間でも毎回20人ほど見かけるなど、調査結果の一端を実感したところでした。同調査には観光消費額推計などもありますので、関心がおありの方は台東区ホームページからご覧ください。(H)

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32

電話:(03)3822-2101

FAX:(03)3822-2105

E-mail:jimu@japan-acad.go.jp

第16号:発行日:平成27年10月9日

(年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>